

- 15) R. Scherhag, 1952: Die Explosionsartigen Stratosphärenwärmungen des Spätwinters 1951/1952, Berichte des Deutschen Wetterdienst in der U.S.-Zone, 38, 51—63.
- 16) H. Riehl, 1950: Variations in the Structure of High-Level Cyclones. Bulletin of the American Meteorological Society, 31, 8, 291—294.
- 18) J.C. Thompson, 1957: Analysis of Lower Stratospheric Pressure Maps in the United States, Paper presented to Meeting of Committee for Aerology/WMO, Paris, June 18—July 9.
- 18) R.A. Craig and W.S. Hering, 1957: Technical Memorandum to the Director, Geophysics Research Directorate, GRD-TM-57-17, Air Force Cambridge Research Center.
- 19) Stark, P., 1957: The weather and circulation of January 1957—a month with a persistent block in the Gulf of Alaska. Mon. Wea. Rev., 85, 19—27.
- 20) Woffinden, C.M., 1957: The weather and circulation of February 1957—another February with a pronounced index cycle and temperature reversal over the United States. Mon. Wea. Rev., 85, 53—61.

神山恵三氏の訪中について

日本気象学会 国際学術交流委員会

気象学会々員神山恵三氏は、日中友好協会学術代表団の一員として、さる11月26日に羽田空港を出発し、約1か月にわたり中国各地を訪問されました。このことは、日中両国民の友好を深め、学術的な交流を盛んにする上に極めて大きな意義を持つものと考えられます。

今回の学術代表団は、中国科学院から日中友好協会に約10名の招待があったことに基いて結成されたもので、日中の学術交流を進めるための基本的な討論折衝を行って今後の活動の中核となることが、その最大の使命となっています。気象学会では、会員神山恵三氏をその適任者として推薦し、幸いに自然科学部門の代表5名中の一員に加えられました。さきに日本気象学会理事長より中国気象学会々長あてに、学術交流についての2、3の提案をしたことは本紙第11号に掲載されている通りであります。神山氏はその具体的折衝を進めるという任務のほか、会員各位から寄せられた希望などを背負って広汎な活動をして居られるものと期待されます。

国際学術交流委員会では、神山氏の中国訪問を実現させ、より多くの成果がえられるように、訪中募金を行いましたところ、多数の会員をはじめ各種団体などからご賛同をえ、現在までのところ下記のような多額に達しました。ご賛同下さいました各位には、紙上を以て厚く感謝の意を表わします。なお下記総額のうち、32,000円は日中友好協会の連絡活動資金として上納し、残額を神山恵三氏へ訪中準備金、中国滞在中の各種活動資金および訪中期間の賃金不払分補てんなどの諸出費の一部として差上げました。なお、最終的な明細は追って御報告致します。

1960年12月

ますのでご了承下さい。

記

神山氏訪中募金(12月15日現在、申込順、カッコ内の数字は口数) 合計金額 52,600円也

1,200円 気象庁電子計算室有志 荒川昭夫(1) 藤原滋水(0.5) 寺内栄一(1) 鍋島泰夫(1) 伊藤宏(1) 斎藤直輔(1) 岸保勘三郎(2) 新田尙(1) 磯野良徳(0.5) 大河内芳雄(0.5) 鷺坂恭一(0.5) 増田善信(2)

1,500円 気象研予報研究部有志 千秋鋭夫(1) 栗原宜夫(1) 浅井富雄(1) 窪田正八(2) 片山昭(1) 竹内衛夫(3) 相原正彦(1) 松本誠一(3) 堤敬一郎(2)

100円 三崎方郎(1) 100円 小林正治(1) 100円 内藤恵吉(1) 100円 当舍万寿夫(1)

1,700円 レーダー気象談話会有志 今井一郎(2) 小平信彦(2) 渡辺和夫(2) 戸矢啓吉(2) 当舍万寿夫(2) 青柳次郎(2) 市村市太郎(2) 柳沢善次(2) 藤原美幸(1)

200円 レーダー気象談話会有志 東管レーダー係(2)

1,200円 気象研高層物理研究部有志 石井千尋(3) 鈴木正(1) 北村正亟(1) 小林寿太郎(1) 外山芳男(1) 経塚貢(1) 石川業六(1) 関原疆(1) 村井潔三(1) 小川芳雄(1)

3,600円 気象研応用気象研究部有志 粗山政子(3) 増山元三郎(5) 佐藤純次(1) 伊東疆自(5) 丸山晴久(2) 成瀬弘(2) 浜呉一(2) 森口実(2) 矢野直

—以下25頁へつづく—

しばしば見られる現象である。

気圧傾度、前線の位置などにもついて調べてみたがあまりよい関係は得られなかった。

4. むすび

本調査では清水の海陸風が比較的明瞭に現われたものについて調べた。その結果は各項に示したのでここにはふたたび掲げない。本文中でものべたようにこれら以外に海陸風の現象はさらに数多く見られるが、おいおい調べて予報に資するようにしていきたい。

—11頁よりつづく—

(2) 柏木力(3) 小林節子(1) 山路勳(2) 三寺光雄(2) 高橋もと子(1) 北川寿江(1) 高木昇(1) 河合熙子(1)

700円 気象研物理気象研究部有志 高橋喜彦(3) 相馬清二(1) 根本茂(1) 内田英治(1) 佐粧純男(1)

500円 気象研海洋研究部有志 宇野木早苗(1) 小泉宗三郎(1) 渡辺明(1) 阿部反三郎(1) 福岡二郎(1)

400円 気象研地震研究部有志 木沢綏(3) 古田美佐夫(1)

900円 気象研予報研究部有志 小沢正(2) 曲田光夫(2) 戸松喜一(2) 藤田敏夫(3)

3,300円 東京管区气象台有志 畠山久尙(10) 生沼明(5) 藤田兼吉(5) 須田滝雄(3) 太田芳夫(3) 正務章(3) 船津康二(2) 伊藤直次(2)

1,000円 気象庁長期予報管理官室有志 大竹市郎(1) 根本順吉(1) 須田建(1) 佐藤和敏(1) 田代茂夫(1) 檜山国雄(1) 久保木光照(1) 朝倉正(1) 力丸忠幸(1) 蓮仏万寿夫(1)

3,000円 全国気象職員組合

400円 災害グループ有志 奥田穰(1) 渡辺和夫(1) 渡辺次雄(1) 荒井隆夫(1)

200円 気象庁産業気象課有志 中島博(1) 久保次郎(1)

1,500円 横浜地方气象台有志 久保時夫(5) 有志(10)

3,000円 社団法人日本防錆技術協会

100円 某氏(1) 500円 正野重方(5) 100円 加藤博(1) 100円 大喜多敏一(1) 500円 磯野謙治(5) 100円 角川正義(1) 100円 大竹武(1) 100円 松村信男(1)

600円 気象庁高層気象課有志 北岡竜海(1) 大井正

1960年12月

最後にこの調査にあたり色々とお御指導、御援助をいただいた中村所長ならびに佐野技術係長に厚く御礼申し上げます。

参 考 文 献

1) 神戸海洋気象台: 燧灘の海陸風 研究時報 第4巻第9号 65~74

2) 門脇武夫: 石巻における海陸風 研究時報 第4巻第5号 86~88

—(1) 内川規一(1) 新井重男(1) 山田一(1) 藤本博(1)

400円 気象庁予報課有志 平塚和夫(1) 有住直介(1) 白岡久雄(1) 小林典謙(1)

200円 広島地方气象台有志 山本常男(1) 根山芳晴(1)

1,000円 高松地方气象台有志 吉野 格, 小林清一, 吉良 清, 菊田一郎, 会田 勳, 田中貞三, 出水雅善, 三好信之, 工藤良平, 能戸時男, 野口 孝, 松岡 隆, 滝乃一郎, 鈴木 齊

100円 星野常雄

400円 気象庁研修所 殿村清人(1) 堀口剛二(3)

300円 気象研予報研究部有志 鈴木栄一(2) 荒井康(1)

500円 気象研総務部有志 柏原茂(1) 飯塚達男(1) 永田事司(1) 常田昌夫(1) 村瀬れん子(1)

1,900円 気象研測器研究部有志 水野長輝(3) 常岡伸祐(2) 塚本喜蔵(3) 田村昌進(3) 仲本賢次(3) 高橋克己(2) 魚津博(1) 矢崎好夫(2)

300円 気象庁測器課レーダーグループ有志

1,000円 名古屋航空測候所有志 滝沢元助(2) 伊藤得郎(1) 坂本篤造(1) 中沢全一(1) 森脇康夫(1) 原田功(1) 牛王峯(1) 須藤健次(1) 後藤義夫(1)

10,000円 陸上構造物防食研究会

600円 日本気象学会九州支部有志 深谷禎二郎(1) 峰岸正太郎(1) 吉井四郎(1) 林俊雄(1) 神代賦信 山田三朗(1)

300円 武田 武(3) 100円 杉山竹造(1)

500円 気象庁図書課 校庭信一(5)

1,100円 測器課 吉武素二(3) 藤原寛人(2) 鈴木徹(1) 中村敬作(1) 宗像明夫(1) 河野幸男(1) 飯塚利一(1) 狩野京一(1)

—29頁へつづく—

昭和35年度春期日本気象学会九州支部講演会

会期 5月26, 27日 会場 雲仙公園県営国民宿舎

講演題目 第1日(26日)午前8時30分~12時

順序	講演題目	所属	氏名	時間(分)
1	流域別の降雨積算効果の評価と雨に関する注意報、警報の基準	福岡	岡 千束	20
2	福岡における降雨強度について	下関	服部 徳一	15
3	一般利用者のための梅雨の統計について	福岡	小島 隆義	15
4	ぐずつき型と宮崎県の雨量について	宮崎	山本 賢三	15
5	低気圧の経路と大分県の降雨分布	大分	糸山 真一	10
6	台風の経路と大分の風雨について	〃	田中 虎治	10
7	地形性降雨の気候的一考察	熊本	山鹿 延	10
8	昭和34年7月における長崎県の豪雨解析	長崎	尾崎 康一	17
8'	人工降雨の研究の現状について	九大	武田 京一 坂上 務	15
9	平均Jetの強度による山口県梅雨量の予報法	山口大	山本 武夫	15
10	下関の風の特性的について	福岡	黒木 義秋	15
11	対馬海域の風と波(第2報)古志岐島の風について	〃	浦川 武雄	17
12	西日本の強風について	大分	笠村 幸男	10

第1日(26日)午後13時~17時30分

13	佐賀の海陸風と北東風について	佐賀	島本 準	10
14	台風5914号に伴った波浪について	長崎	城間 恒信	17
15	高潮予報の実験式について	下関	中島 輝之	7
16	九州および山口県のたつまきについて	福岡	峰岸正太郎	15
17	東支那海における不安定線発生箇所について	熊本	木下 正時	15
18	不安定度による雷の局地予報	宮崎	宗 英雄	10

—25頁よりつづく—

700円 舞鶴海岸気象台 川瀬二郎(2) 井野英雄(1)
後藤大喜夫(1) 坂根教閣(1) 吉田実(1) 山崎貞夫(1)400円 長野地方気象台 北出正清(1) 宇田川和夫(1)
百瀬悦也(1) 草間宗三(1)

150円 有線通信課 岩佐宗義(1) 厚木邦彦(0.5)

700円 気象庁海洋課 淵秀隆(5) 増沢謙太郎(1) 安

19	飛行報告よりみた福岡一沖縄間の前線について	板付	八尋 勇	10
20	大火の発生、拡大と気象について	下関	赤井 清康	15
21	中層雲向と天気について	厳原	鬼橋 武治	10
22	富江の天気	富江	藤田 光義	5
23	シークラッターによる海況予報への試み	種子島	大迫 盛夫	15
24	台風の中心とレインバンドの幾何学的関係	〃	大枝 良介 井田 官上	10
25	種子島レーダーで観測したRadio duct について	〃	井田 利規	10
26	レインバンドの走向と移動	福岡	土井 謙二	10
27	降雨セルの移動と上層との関係	〃	井田 秀治	15

第2日(27日)午前8時30分~12時

28	鹿児島における放射量の収支の状態	鹿児島	植村 八郎	15
29	塩塵霧害の研究(第3報) 煤塵量と下層大気との関係	福岡	山田 三朗	20
30	突風の種類とその機構について	〃	〃	20
31	予報法則の探究(第4報)類似天気図の再認識について	〃	植木九州男	17
32	福岡県の統合予報調査(第1報)	〃	加藤 忠 石井 一男	15
33	昭和34年9月以降の桜島の活動について	鹿児島	野田 義男	17
34	桜島火山活動の予測について	〃	東谷 幸男 安井 豊 野田 義男 利光 貞夫	20
35	阿蘇山活動資料について	阿蘇山	山口 弘次	15
36	雲仙温泉と地震について	温泉岳	田畑 七郎	17
37	五島における火山と火山弾	富江	山野 道雄	7
38	霧島(新燃)の微動状況と表面活動との関係	宮崎	長友 久雄	10
39	霧島山麓の造林不成績地における気温の観測結果について	〃	田辺 剛	15

井正(1)

3,700円 大阪管区気象台 大谷東平(2) 石井正語(1) 荻谷長男(1) 高橋信也(1) 佐古武夫(1) 更屋千之(1) 中島治雄(1) 浜田周作(1) 齊藤将一(1) 中島暢太郎(1) 藤範晃雄(1) 奥村慶一(1) 佐藤功(1) 内田浩一(1) 越智暁(2) 稲浦昂(1) 喜田村一男(1) 原田朗(1) 中西盈(1) 大西慶市(1) 成川二郎(1) 梅原康夫(1)

—31頁へつづく—

問題が残されよう。死亡統計はたしかに正確ではあるが、そこでは災害そのものの資料としての情報価値は極めて小さい。そうした点を考えれば、水増しされた報告資料は不正確ではあるが情報価値は死亡統計より小さいとは考えられない。正務、毛利氏は災害資料について直接触れているわけではないが災害高の一元的表示が、その底流となっている。DDA 曲線は実用的な面からの要請ではあるが、災害による被害の異質なものを同質なものとして取り扱っているところに無理があり、更には災害地域の量的な規定に成功しても、一面質の問題がこぼれ落ちると言う点が残される。

災害における資料の量と質の問題については、極めて重要な問題であったにもかかわらず、シンポジウムでもその点が触れられなかった。ただ石井素介氏が、話題の中で若干触れたにしかすぎない。

ii. 災害調査の立場

今回の講演ないしシンポジウムの内容を通してわかることだが災害への関心の程度はそれぞれ異なっており、それだけではなく災害とは何かそうしたことについても十人十色だったのではないかとさえ思われた。それは災害全書(昭28)にも述べられているように、災害の定義が一致していないことからとも言えるであろう。

かりに、ここで災害とは何かと言うことについてはこの会に集まって来た人々の了解事項として進めたにしても、災害調査の問題点としては、「その立場」は極めて重要である。

われわれの調査は単に客観的な資料を得るために調査されるのではなく、多くの場合、目的があり、それにそって行動が試みられる。

その場合AとBの資料が異なったからと言ってそれは客観的ではないとはいえない。その違いは、むしろ立場の違い、したがって立場のちがいがらくる評価のちがいののである。

今回の討論では資料の客観化といったことについては意見が述べられたが、評価の問題については討論が進まなかったのは、こうした問題をテーマとしたシンポジウ

ムとしてはきわめて片手落ちだったように思われた。

iii. 気象災害の研究方法

気象災害という用語は、一般にいわれる災害とどのような点でちがうかはっきりしない。しかしここでは災害の主導因が異常気象であるという意味において使用した。

渡辺次雄氏は、気象災害の研究方法として位相幾何学を取り上げられた。このことは渡辺氏の演題にもあるように気象災害系の概念、そうした系概念から当然一つの方法的な手段として、位相幾何学の導入は考えられることである。たとえば、ファラデーが電気や磁気の現象について、電荷体に作用する力が電荷体そのものにあるのではなく、それを中に含む周囲の媒質にあることを発見することによって、場の理論に、位相数学が考えられたように、また心理学でもその方法として場の幾何学が問題とされる。(たとえばトポロギ心理学の如き)ところで渡辺氏の、きわめてすぐれた方法論も果して災害の研究に適当であるか?、レヴィンはその著書[Field Theory in Social Science 1951]において「……形式的定義、仮定および、演繹、更に幾何学的にある着想を示すことは早まったことであろう」という。渡辺氏の講演をきいた範囲においてレヴィンのそうした批判はここでも通用するのではないかと思われた。

3. むすび

以上述べた2、3の感想も結局は、災害そのものの認識のちがいによるのであろう。われわれは「災害から国民を守る」ことについて考えるならば、立場の相違(階級的なちがいはなく)をすてて「災害から国民を守る」という考え方に立つことが基本的に要請されるのではあるまいか、わが国における幾つかの災害論も、研究結果も政治的貧困が災害対策をして悪循環させていることを指摘したものは少ない。そうした意味で、今回のシンポジウムも資料や調査方法についての論議はあったが災害の基底である社会そのものについての性格の分析が抜けてしまったのは残念であった。

—29頁よりつづく—

山岸米二郎(2) 後町幸雄(1) 中野道雄(1) 一色光雄(1) 板東丕(1) 海部佳明(1) 中村春雄(1) 青木政好(1) 小川泰平(1) 浅井正雄(1) 森田高明(1)

1,350円 柴田淑次(2) 菊地徹夫(0.5) 内海徳太郎(1) 吉田泰治(0.5) 和田英夫(2) 草野和夫(2) 安藤正次(1) 吉田作松(1) 野口和則(0.5) 角野迪夫(1) 関根勇八(0.5) 小林勉(0.5)